

おおむや 読書バトン

第9回
「地球」
テーマ

① ポルトガル語ってかわいい

先日、山形と宮城の県境にある蔵王を旅行しました。その目的の一つは、蔵王連峰の噴火活動によってできた火口湖を見ることでした。その湖を満たすモスグリーンの水は、神々しくもあり穏やかもあり、地球のエネルギーを感じさせるものでした。

今回紹介したいのは、この火口湖が重要な舞台となる『キャブテンサンダーボルト』です。些細なことがきっかけで気まずくなった友人同士が12年ぶりに再会し、世界中をバッタリに陥れかねないような事件に巻き込まれていきます。

この小説におけるテーマの一つは「環境保護」。昨今猛威を振るうコロナウイルスや異常気象を経験したうえで、敵キャラの歪んだ地球保全意識に突き動かされた行動に対し、私たちにはただ狂気を感じるのでしょうか、それとも：

もう一つおすすめしたいポイントは、登場人物のセリフです。ふつと笑えたり、ほーと感心したり、いつか自分でも使ってみよう之心のメモ帳に書き込んでいます。そして気になるのが、このとてつもないミッションに立ち向かう主人公たちの原動力とは何かということです。ぜひとも読んで確かめてください。

ということで次のバトンは「原動力」です。

紹介者：プロッコリー

紹介した本
阿部和重著
伊坂幸太郎著
文藝春秋
2014年



カレッカ(careca)辞書で調べてみると、〈頭に髪の毛がないこと〉という意味でした。「パンのことをいう」と言うようなことは、一切書かれていません。仲良くなったブラジル人や日本人にどうしてそう言うのかを聞いてみると、昔からそう言っているから分からないとのことでした。また、よく行くパン屋さんの、日本語を教えてと話しかけてくる店員さんにも尋ねたこともあります、こちらもずっとそう言っているから解らないと言っていました。「うちの店長は剥げているよ」とも言っていましたが……

あるペレンの人がサンパウロへ行ったとき、いつものようにパン屋でパンを買おうとしたら「カレッカ」が通じず、思ったものと違うものがでてきたと言っていました。その人は「カレッカ(careca)って方言？ペレンでしか通じないの？」と驚いていました。ブラジル北部(パラーラー州ペレン)の方言なのでしょう。ペレンの人たちは、何の疑問も感じず、まして方言とも思わず、普通に使っていますから。



怪盗 ひつじ兄弟現る！！



心なごむ、ハナミズキの並木道



大宮
20景

大宮公園と大宮第二公園を結ぶ公園連絡通路はハナミズキの並木道です。4月下旬から5月にかけて花盛りで、白から紅色へのグラデーションが美しい花びらは灯りのように点ります。ハナミズキは英語でdogwood(犬の木)といい、その語源には諸説あるそうですが、犬の散歩にぴったりの趣です。

「呪術師トロガイ」



老賢者が好きだ。
強くて美しい主人公には憧れるが、それと同じくらい、あるいはそれに主人公を支えに行く道を指し示す老賢者に惹かれてしまう。

「精霊の守り人」をはじめとする『守り人』シリーズに登場する

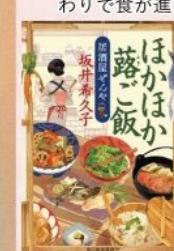
呪術師トロガイもその一人だ。とにかくこの人一筋縄ではないから、都から追手を差し向けるよりも呪術でかわせてしまう。その上、追手の持ち金を巻き上げて里に下りてうまい酒にありつけ、「などとのたまう」精霊の世界の住人と言葉を交わせるほどの能力の持ち主なのに、茶目っ氣たっぷりのお方なのだ。人々が運命に翻弄され、あるいは日々の暮らしに追われる横で、トロガイは今この世界で何が起ころうとしているのか、ということに耳を澄ます。人間界で何が起ころうとしているのか、などと見えてののかを考えながら、ずっとと速い先を見つめる。この老賢者の目には、社会がどうのようになつていているのか想像すると果てしないが、武器を持って戦う力のない彼女は、知力でもつて世界の姿を誰よりもはっきりと捉えている。弟子の背中で悪態をつく姿からは、とてもそんな風には見えないけれど。

鶯の鳴き声から始まる、美味な小説があります。寛政2年。剣術よりも鶯の次男坊・只次郎が、大切な預かり鶯が見つからず困り果てるところから始まります。顔見知りの鶯の糞買い又三に誘われるまま、神田川沿いの小さな居酒屋「ぜんや」へ足を踏み入れると、菩薩のごとき美貌を持つミステリアスな女性と出会います。お妙という名のその女性に、心も胃袋もつかまれた只次郎は「ぜんや」へ通うようになります。

武士より商人になりたい只次郎をはじめ、近所のおかみ連中や大店の重鎮達など、このお店に集うのは個性的な人物ばかりです。それぞれ抱える悩みも様々ですが、「ぜんや」の料理を食べるとあら不思議。いつの間にか問題が解決してしまいます。身体をいたわる工夫と手間のかけられた料理はどれも美味しいそうで、読むとにわかに日本食が食べたくなります。

特に只次郎は何でも美味しい食べ、食リポが大変上手です。いつも料理のシメには炊き立ての飯が出て来るのですが、ふふふと頬張る描写だけでもおかずになりそうです。皆様はお米を1週間に何度食べていますか？面白く読みながら、自分の食を見つめます。

実はこの小説、ママやプレママにもおすすめです。何を隠そう私は妊娠の頃にこの小説を読み、「日本食マインド」で適切な体重増加と血圧で過ごすことができました。さらに物語には「子を授かりたい」「つわりで食が進まない」「赤ちゃんが離乳食を食べてくれない」などママが共感できる話題が登場し、強く生きる江戸の女性達の姿に元気をもらえます。



紹介した本
『ほかほか落ご飯』
坂井季久子著
角川春樹事務所 2016年



大宮図書館
ホームページ



大宮図書館
twitter



twitterではイベントやスタディーコーナーの待ち人数など大宮図書館の情報を日々つぶやいています。ぜひ、フォローしてみてくださいね！

この刊行物の書影画像はBOOKデータASPから引用しています。